

都 退 教 協 だ よ り

No. 263

'14.12.17

東京都退職教職員協議会 会長 柴田 迪 春
〒101-0003 東京都千代田区一ツ橋2-6-2 日本教育会館 2F
東京都公立学校教職員組合内
TEL 03-5276-1311 FAX 03-5276-1312
E-mail ttu@tokyokyouso.org

第二〇回 日退教組織活動交流集會に参加して

藤崎 喜仁

一〇月一七日ラポール日教
済で開催された日退協組織活
動交流集會で、私は第三分科・
分散会「福祉・文化・組織」の
司会を務めました。その感想を
含めた報告です。

北海道からは三十一年前の
一九八三年から始めた「誕生カ
ード」の取り組みが報告され
た。

毎年七七歳(喜寿以上)の会
員約四千人に送っているとい
う。誕生カードには北海道の高
山植物や野草の紹介と写真。詩
や作家・詩人などの言葉が添え
られている。喜寿からは毎年誕
生カードが届くので、毎年違う
花の写真や生きる力や喜びに
なる名文に会員は勇気づけら
れる。

お礼のお便りには「カードに
励まされ八七歳、頑張って生き
たい」「カードの写真と言葉に
心の底から湧き出る勇気を頂
いた」「素晴らしい命の輝きの
ようなカードに感謝」等の感想
がたくさん寄せられている。

北退教通信には、喜寿と米寿
の会員の氏名の掲載とお礼や
感謝の言葉を全て紹介してい
る。これが大切と思う。集會参
加や動員等の関わりは、年齢を
重ねることに辛くなり機会も
少なくなる。しかし、思考する
力は急激には衰えない。自分の
言葉が通信で紹介されること
は、生きる力になるし会員への
励ましのメッセージにもなっ
ている。また、二四もある支部

では、老人ホームや幼稚園を訪
問し、手品の披露や指導をした
り、民生委員と協力して地域の
一人暮らしの手助けも行っ
ている。

茨城県退協からは、「組織拡
大の為に愛好祭の成功を」が
報告された。「人生九〇年時代、
健康で老後三〇年をどう生き
るか」を課題にした取り組みで
ある。「退職して多すぎる休息
が苦痛」という会員の思いをう
けとめ、趣味を生かしたサーク
ル活動の発表の場として、「愛
好祭」文化祭の開催を決定し
て八年目になる。愛好祭は退教
協会員だけでなく退女教や一
般市民にも呼びかけ、規模を
年々拡大充実させてきた。

サークル数は詩吟・園芸・写
真・囲碁など十以上あり、展示
発表とステージ発表もある。
開催期間も五日間というのが
すごい。また、遺作展もあり遺
族の賛同を得て、他界して五年
以内の元会員の作品も展示し
ている。

退職後の人生計画は「自分が
主体的に動かないとダメ」とい
う。愛好祭の取り組みは「人間
関係の希薄化を埋めていく」ば
かりでなく、会員参加のみなら
ず一般参加も認めている。

これが他の団体との繋がりを
作り、地域の文化活動の質的
向上に貢献している。組織拡大
の鍵はここにあると思う。活動
の場と成果の発表の場が保証
されることが重要と思う。

福井県退教からは、年々入会
者が減り退会者が増えていく
という組織率の低下に、どう歯
止めをかけていくのか「組織拡
充に向けた」取り組みが報告さ
れた。

加入を断る理由は、「組織か
ら解放されたい」「何のメリッ
トがあるか分からない」「役が
当たるから」などや、「親の介
護がある」「再雇用等で生活に
時間的余裕が無い」もあるとい
う。組織と云う枠に捉われない
生き方や生活スタイルの個人
化が組織離れを助長し、退職高
齢者の地域社会や情報からの
孤立化に繋がっていくことを
懸念し、これらの打開として
「生きがいがづくり」を支援する
活動に取り組んできた。ここで
もサークル活動の充実で、地域
の人々と共に趣味や特技を共
有して地域づくりに貢献して
いることが報告された。また、

「福井の教育を良くするため
の県民連合」を県教組や連合福
井、県PTA連合会などと結成
し、教育条件整備闘争にも取り
組んでいる。日退教の闘争課題
にも意欲的で各種署名活動や
災害支援カンパ活動にも勢力
的である。サークル活動と組合
活動の両輪が機能している報
告と感した。

大分県退現教からは「未来を
ひらくむらづくり」が報告され
た。少子・高齢化・後継者不足
で「限界集落」が増え続けている
豊後大野市緒方町。この町の

井上地区は、住宅七〇戸人口二
百人で水田農家が大半であ
り高齢化率は四七%という。
「農村の衰退と集落維持機能
の低下」に「人が地域をつくり、
地域が人をつくる」を命題に、
むらづくり協議会を立ち上げ
て活動を開始したのが一九九
一年である。

以来二五年近くにもなる「む
らづくり」活動の取り組みは、
どれも素晴らしいものだった
といえる。

第一期の一〇年間は、農道整備
や農産物加工所・ふれあい広
場・農産物直売所建設や国道に
ヒガンバナや水仙ロードを植
栽し、合わせて広報活動にも力
を入れてきた。

第二期は「むらづくり協議会」
を一人団体で設立。むらづくり
ビジョンの策定とともに、農村
文化部を立ち上げて、文化祭を
行い祭りや盆踊り、映画会を
実施する。また地域の生き物調査
や環境保全にも取り組んだ。

「緑豊かな農村公園構想」のも
とで、農道の彼岸花植栽と桜並
木づくりにも着手する。結果、
豊かな田園環境と地域住民の
意識改革も進み、未来に向けた
次世代の人づくりや地域づく
りの展望も期待できる実践と
いえる。

吉田一徳東京教組元委員長逝く

吉田一徳さんが、去る六月二八日に享年六七歳という若さで急逝されました。吉田一徳さんは、都退教協常任委員、東京教組の書記長、委員長としてご活躍をされ、退職の後、公益財団法人日本中国国際教育交流協会の業務執行理事として亡くなる直前まで、日本と中国の教育交流にご奮闘をされていました。

十月四日には、吉田一徳さんを偲ぶ会がフロンティア青山で開催され、中国宗慶齡基金会作成の「メモリアルフォト=訪中時の吉田一徳さん」の上映や、多くの方たちから様々な思い出やエピソードをお話いただき、吉田さんの歩まれた足跡を振り返り、その人柄を偲び、業績を確認することができました。

吉田一徳さんは、誰にでも温かく心を込めて接するとともに、何事にも誠心誠意、真面目に、実直にとりくまれる方でした。そして、日本と中国の友好に心を砕き、何よりも平和を愛する方でした。

都退教協会員一同、吉田一徳さんのご冥福を心よりお祈り申し上げます。



しかし、残念なことにこれは行政主体の「むらづくり」の報告に思える。報告者は初期の段階からこの「むらづくり」に中心的に関わり牽引してきた方であり、彼なしにはこの「むらづくり」の推進や発展はありえなかつたと思う。だが、報告の中に退職教員や日退教としての関わりや取り組みの活動が何一つ無かつた。各県の退教協

の運動の進め方の特色や成立の歴史的経緯など様々あるが、今後の課題として、日退教としての関わりをどのように作っていくかが問われると思う。



安心と信頼の社会保障制度を確立しよう！

戦時中見聞きしたことを東京に残された姉と私

柴田 迪春

私は東京・下谷区(現台東区)入谷町で生まれ育ちました。6歳になったばかりの1944

(昭和19)年3月、突然家族と離れ、姉と二人東京で暮らすことになりました。きつかけは3歳上の兄が「学童疎開」(国民学校初等科3年から6年生まで)の対象になりましたが、病弱のため親戚を頼つての「縁故疎開」となり、家族と引越すことになったからです。大部分の健康な児童は、家族と別れて空襲の心配がない田舎のお寺などに「集団疎開」しました。

なぜ姉と私が東京に残されたかという点、姉は当時高等女学校(5年までであった。男子は中等学校・つまり男女別学)2年生(今の中2と同じ)でしたが、学校には行かず、工場に通っていました。私はその4月入学予定でしたが、5歳時に「変形性股関節症」で入院し、入学は無理だろうと「1年間延期」を両親が決めていました。また、前に通っていた入谷幼稚園(全部の幼稚園は空襲のため閉園になり、卒園できませんでした。つまり、私は「幼稚園中退・小学校浪人」ということになりました。姉が工場勤務のため、東京を離れることができない、一人では心細いだろうと、両親は多分私を残したので。姉は工場で何をしているのか聞いても、「秘密だから」と教えてくれません。敗戦後に、「実は亀戸の第二精工舎で、機関銃の弾丸磨きをし

ていた」と明かしてくれました。

姉は「出勤」する前私と朝食を食べ、お昼の用意もしてくれていましたが、時々寝坊したときなど、どんぶりと十銭紙幣2枚、それと外食券(チケツト)を卓袱台(ちゃぶだい)の上に置いて、「今日はこれ持って大場さんち(大場食堂)の前に並ぶのよ」と言っ出て出かけてました。どんぶりを抱えて、二〇銭と外食券を握って、早めに並べ



戦後七〇年の節目に

東京高退連が「戦時下の体験(談)」を募集しています

東京高退連は、来年2015年が「戦後七〇年」になるのを期して、10月の総会を目的として、上記「表題」の文章を「冊子」としてまとめる予定で準備を進めております。

そのため、加盟各団体の会員から文章を募集しております。その趣旨は、高齢化が進み、体験者が年々少なくなる中で、今ご存命の方々から、戦争とはどういうものだったのか、また戦時下で、一般庶民がどういう生活を余儀なくされていたのか、などを記録していただきたい、ということと、そこには、今後二度と戦争を繰り返してはならない」教訓の一助として

ば、ほとんど芋や豆で、米粒などないような雑炊一杯買えますが、少しでも遅れると、ちやうど私の前の人で売り切れということもありました。そういう日は昼食抜きでした。そのころ、浅草国際劇場から上野にかけて「強制疎開」(姉は「防火帯作り」と)がありました。毎日通っていた「鶴の湯(銭湯)」も壊され、とても困りました。ただ、壊された家の跡には、ビー玉や空き缶など色々なものが落ちていたので、拾ってきて遊びに使いました。

(つづく)

いければ、という願いが込められています。内容は、前の大戦中に、「自身が直接「体験」・「見聞き」されたことは勿論ですが、子どもの頃、ご家族やご親戚、あるいはお友達や知人の方々などから「お聞きした話」等です。また、「ご高齢で「文章を書くのはどうも・・・」という方から「聞き取って」いただいたお話でもけっこうです。文の長さは「任意」ですが、応募された文章の中から「都退教協だより」に掲載を予定していることや、「冊子」としてまとめる必要があるなどの関係で、400字詰め原稿用紙で

11.11 戦争させない・9条壊すな！ 総がかり国会包囲行動に7000人

11月11日夜、「戦争させない・9条壊すな！総がかり国会包囲行動」が行われ、約7000人が参加し「安倍政権にNO！」の声をたたきつけました。小雨まじりの中、国会周辺には解釈改憲で集団的自衛権の行使を容認した安倍政権に反対する市民らが続々と集まり、国会議事堂前の歩道を埋め尽くしました。議員会館前には鉄柵が設けられ、大勢の警察官が参加者を囲んでものしい雰囲気の中、参加者はキャンドルライトやペンライトなどをかざし、時間を合わせて四方から「集団的自衛権反対！」「行使容認、今すぐ撤回！」「戦争する国、絶対反対！」「9条壊すな！」の同時コールを行いました。



集会では、戦争をさせない1000人委員会呼びかけ人の福山真劫さん(平和フォーラム代表)が行動提起を行い、「来年1月から3月にかけて予定されている日米ガイドライン改定の合意を絶対に許さない行動を行ってきたい。その後5月から7月にかけて、集団的自衛権行使容認の閣議決定を受けて戦争関連法案が国会に提出される見込みで、ここが最大の山場だ。国会周辺に結集して安倍政権に揺さぶりをかけたい。今日の国会包囲行動は2団体の共同行動だが、他にも憲法や平和を訴える多くの団体がある。来年の闘いは総行動で安倍内閣を包囲し、安倍の政策転換を勝ち取りたい」と訴えました。国会周辺の各所では野党の国会議員や、1000人委員会呼びかけ人の鎌田慧さんや落合恵子さんらが「憲法違反の閣議決定に基づく日米防衛ガイドラインや戦争関連法案制定を阻止しよう」などと力強くアピールし決意表明を行いました。また、衆議院解散報道が流れる中、神本みえ子、なたにや正義日政連議員をはじめ、各党議員・地方議員が次々と訴え、終了予定時刻を過ぎても、怒りのコールの声は国会議事堂を圧倒しました。(城田記)



秋の交流会・井の頭公園 11月7日

朝は晴れていても昼近くになると雨が降りだすといった不順な天候が続く日々ですが、11月7日は、朝は少々寒かったけれど、日中は日差しもあり気持ちのよい一日となりました。11時にJR吉祥寺駅に集合し目的地の井の頭公園にむかった。駅でも我々と同じような年輩の小団体がいくつも待ち合わせをしており、それらの団体がみな井の頭公園にむかう。ウィークデーなのに大変な人出でした。公園に入ると、一人で歩く老人、ジョギングをしている人、幼稚園、保育園などの団体等々、小生20年ぶりの井の頭公園だったが、人の多さに少々びっくりした。

現役時代の勤務地は杉並が長く、住居も杉並なので、たびたび井の頭公園には来ていたが、花見のシーズンは、すごい人出だったが、この時期にこれほどの賑わいとは想像しなかった。私達は、のんびりと池の周囲を休み休みしながら1時間半ほどかけて歩き秋の公園を楽しんだ。



吉祥寺駅前にもどり懇親会となったが、会場さがしに少し手間取ったが、手頃な居酒屋が見つかり待望の懇親会を開催することができた。天気もよく、有意義な交流会ができたと思う。来年の花見に再開を約して散会した。

参加者は、安部 金岡 柴田夫妻 杉野 谷口 別所 秋元の八名でした。